

日本中世における禅僧の女人教化

——一休宗純の事例を中心として——

海老澤 早 苗

一 一休宗純の生涯（はじめにかえて）

一休宗純（以下一休と略称す）の女人教化の内容に入る前に、一休その人物について、伝記的にみておこう。

一休は、父を後小松天皇とし、母を南朝の遺臣花園院某の女としたが、応永元年（二三九四）京都の民家において、正月一日、藤原氏の一庶子として京都に誕生した。

六歳、山城安国寺住持象外集鑑（夢窓楚石の法嗣鉄舟徳濟の弟子）のもとで行者となり、周建と安名された。一二歳、山城嵯峨宝幢寺において清叟仁（虎関師練の弟子、東福寺聖一派の人）の『維摩経』の講席に連なり、一三歳、東山建仁寺に移り、靈泉院の慕哲竜攀（古今伝授の東常縁の一族）について作詞を学び、一六歳、同寺を出て壬生の清叟に従って、経録・外典の講を聴き、同時に西金寺に隠遁していた謙翁宗為（妙心寺開山慧玄より授翁宗弼・無因宗因・謙翁と相承した人）の室を叩いて参禅し、両師に師事すること五年、応永二年謙翁が示寂したので、翌年二二歳、かねてから私淑していた華叟宗曇に近江堅田の祥瑞庵に参じ、九年間の克苦をし、宗旨の要を得ることができた。華叟に師侍すること三年、二五歳の時「一休」の道号を授けられ、翌々年二七歳にして鴉の声を聞いて大悟した。応永三四年、実父後小松上皇より時々召され、奉答せしめられ、永享五年（一四三三）上皇崩御の直前に再び召され、先朝の立派な書跡や、名人の草書などの遺愛の品を授けられた。正長元年（一四二八）一休は、三五歳にして華叟の示寂に逢う。

永享一二年大徳寺如意菴（華叟の師言外宗忠の塔所）の塔主となり、先師華叟の一三回忌の法要を行い、同年大徳寺を去って、嘉吉二年（一四四二）護羽山に入り、戸陀寺を建てて居する。文安四年（一四四七）大徳寺派内の抗争を憤り、

再び讓羽山に入り断食して自殺をはかり、後花園天皇は女房奉書を下してこれを慰問せしめられ、自殺を思いとどまると帰京、翌年売扇庵に寓し、享徳元年（一四五二）その庵南の瞎驢庵に遷った。このころから法兄養叟宗頤との不和が表面化し、享徳三年（一四五四）、一休六一歳、一日養叟和尚に逢い、印可について口論となり、これから法の縁が永久にたえることとなる。そして康正元年（二四五五）、『自戒集』を編じ、法兄養叟宗頤を罵る偈文を集めた。

康正二年（一四五六）六三歳、山城新の大応国師の旧蹟妙勝庵を復旧してここにおり、その隣に酬恩庵をはじめ、ここにも寓した。長祿三年（一四五九）春六六歳、徳禅寺住持の請を受けて入院し、寛正二年（二四六一）洛西安井の竜翔寺（南浦紹明開山）の廃寺を興し、同三年秋、痢病に罹り治癒すると桂林寺に兵乱を避け、翌年は賀茂の大燈寺に遇し、年末に瞎驢庵に帰住、応仁の乱により同庵が兵火に罹ったので、東山虎丘庵、薪の妙勝・酬恩両庵、餅原の慈濟庵、南都、和泉、撰津住吉の松栖庵と転々とし、檀越が坂井に雲門寺をはじめたのでこれに寓した。文明五年（二四七三）幕府は陣中に大徳寺を建て、これに請じ、翌年、広徳寺の柔中和尚（大徳寺四四世）は大徳寺入寺の詔勅文を捧じやうて来て、断ることができず入寺法語を作つてこれに応じた。同七年八二歳、薪に移した虎丘庵に寿塔を営み、慈楊と扁した。同一〇年和泉に赴いて住吉慈恩寺に言外宗忠の百年忌を預修して薪の酬恩庵に帰り、夏末に妙勝庵に再住し、同一一年大徳寺法堂の新築を成就した。同一三年大徳寺の山門墻壁を新築し、初冬微恙を發し、十一月二一日、薪の酬恩庵に示寂した。八八歳。慈楊塔に葬り、延徳三年（二四九一）弟子没倫紹等（墨齋）などが大徳寺に真珠庵をはじめこれにも分塔した。

二 一休の女人教化

次に、一休の女人教化の内容を『一休和尚法語』（以下『法語』と略す）にみてみよう。

本『法語』は三部構成であり、第一部は書簡体の候文であり、手紙の相手は一休の母親（心昌）と交友関係にあった貴人の女性であったことが、本文中の

又、母にて候者は、七十六にして、去年果てられ候。心昌辞世歌、

夜々ごとに見えつ隠れつすむ月の変はらぬ色を誰か知らまし

此歌を口遊みて、其後は其様へ参りて、御菩提の心を勧め申候へと、繰り返し申され候つる。

という一文より判明する。

第二部は、仮名書きの公案を与える体裁である。一休は『自戒集』において、比丘尼等に仮名書きの法語を与え、入室參禪、得法させる養叟宗願やその弟子春浦宗熙の教化のあり方を強烈に批判している。この第二部の内容が、歴史上の一休の立場とは、相容れないことは明かであるが、得法、印可証明の受授を目的としない、特に在家の女性に対しては、公案についての法話を求める者があらず、しかるべき態度にてその要請に応じ、仮にそれが事実だとしたならば、以下にみていくような内容であったのではないだろうか。飯塚大展氏によれば、ここに取り上げられた話頭は、大徳寺系、妙心寺系の密參帳を參看すると、いずれも始めの方に見られるものであり、初学者向けと考えられるという。その内容を列挙すれば①不思議不思議、②柏樹子、③万法不侶、④本有円成仏、⑤阿誰、⑥地獄、⑦古帆未掛、⑧臨濟三玄三要、⑨南泉斬猫、⑩臨濟四喝、⑪百丈野狐の十一則である。

そして追申文を挟んで、第三部の和歌、と『法語』は展開する。この部は、多く一休の道歌とされるものによって構成される。いずれにしても、『法語』全体を通読していえることは、第二部にも候文は含まれており、第三部の末文に右の一卷、由無し事なれども、心ざす事の侍りしかば、人の持てるを請て、写し止め侍りぬ。童子、沙を集むる戯れだに、功德の有る由侍り。ましてや、かく尊き法の道を写し止め侍りしかば、仏になる事、疑い有べからずとぞ思ひ給ふる。此次に思ひ出し、言ひ続け侍りぬるま、に、心に任せて、願はずと道の道たる道に行かん身の限り有る道を道にて

とあることから推察して、この『法語』全てが、誰か（一休の母親と交友関係にあった貴人）に送られることを想定して書かれたのではないだろうか、ということである。

以上、『法語』の解説はこれくらいにして、実際に女性にも語られた『法語』に、どのような内容が説かれているのか、少々長い引用となるが、労を厭わずみてみることにしよう。

なお、第一部では、内容を五つに分け、書簡体の文の引用の後に、内容毎に概略的説明を簡条書きにし、第二部では、各話頭毎及び追伸文の後にそれぞれ同様に説明を行い、最後の第三部では、本文全体の引用の後に、第一部同様、簡条書きに和歌により説明された内容を挙げてみたいと思う。『法語』には和歌が七十二詠み込まれているが、第三部には六一首の和歌が集められ、同じような内容の歌が、重複して言葉を変えて詠み込まれている。従って一首毎の意味

を取ることは避け、六一首の和歌に込められた教化の内容、エッセンスを分類して七つの箇条書きとして示すこととする。

〔第一部〕

先御心もちと申は、朝夕仏法に、御油断なき事にて候。古しへ今にいたり、憂世の有様、御夢のごとくにさへ、思し召され候へば、何事も御心のとまる事、御座候まじく候。爰を、仏、御觀念有りて『法華』の文に、「觀彼久遠、猶如今日」と御述べ候。此文の心は、「彼の久しく遠き事を見給ふに、同じく今日の如く見給へ」との御事にて候。天地ひらはじまりしより以来、変はる事なしと、萬の事を悟り給ふ、との御事にて候。然らば、さのみ深く御不審まじく候。仏法と申すは、執着を戒め給う。さらに心をとめても、その甲斐なきことわざ見まいらせ候を、先禪家に用ひ申候。か様に申候事、証拠なく候へば、いかゞと存候て、昔の事を、大方引き申入候。

都に夢窓国師とて、日本に隠れなき御僧まじくける。其比は、尊氏將軍の御代也。彼の夢窓国師、悟りの歌に、

夢の世に夢のごとくに生れきて露と消えなん身こそやすけれ

夫人間の有様、万事とまる事なし。元より生のはじめをしらざれば、死の終をわきまへず、闇々茫茫として、苦しみの海に沈む也。こゝを、仏の哀と思ひし召して、色々の御方便にて、衆生を救ひ給ふ。

されども、人間の心無道にして、悪道へ歩みを進め、善き方へは心進み難く、徒に光陰を送り、六道憐れみの業果絶えず、たましく教へに従ふといへども、名利の善を作す事ばかり也。名利と申は、其身の名を上げ、人に賞められんと思ふ心を種として、堂塔を建立し、時の富貴に驕れり。

かくのごとくの人を、仏は深く嫌はせ給ふ。眞の道は、万事法度を背かず、世に従ひて、憲法なる人を、仏道に成就の人と申也。

御歳も早や暮れ過ぎさせ給へば、何の御望み御座候はんや。殊更地獄の活頭をも、しろしめされ候上は、行水のごとくに、御心をもたせ給ひて、御胸の中に、何事も御座有べく候。こゝを、仏、『三部經』に、「己身の弥陀、唯心の浄土」と述べ給へり。此文字の心は、「己れが心弥陀、唯心の浄土」と申也。然れば、十万億土は、御願ひあ

るまじく候。

仏とは何を岩間の苔筵唯慈悲心にしくものはなし

此哥のごとく、御受用候へば、何事も仏心と見まいらせべく候。古しへ舟田の御方丈にて、程なく宗建をはじめまいらせ、人々過ぎゆかせ給ひ候事、夢とは思し召されず候や。申しても尽くし難きは、かやうに御健気に御入候て、私もながらへ、仏法の御事ども申上げまいらせ候事、他生の縁深きと存候。『因果経』に、「自以誰ならん」と、仏も御述べ候。又、母にて候者は、七十六にして、去年相果てられ候。心昌辞世の歌、

夜々ごとに見えつ隠れつすむ月の変はらぬ色を誰か知らまし

此歌を口遊みて、其後は、其様へ参りて、御菩提の心を勧め申候へど、繰返し申され候つる。彼の御命を背き難く存候て、度々参りつる。母にて候者の事、思い出し参らせ候へば、一入其方へ参り度こそ候へ。早や其様の御覚悟も、大安楽の道に、御心付き候へば、目出度満足致し候。御慰みなどには、御看経も然るべく候。御心尽くしては、努々御沙汰候まじく候。『大般若』の文に、「一切不行を仏の行とす」と御座候。爰を以て、昔、さる知識の歌に、

あら楽や虚空を家と住みなして心にかゝる造作もなし

出るとも入るとも月を思はねば心にかゝる山の端もなし

是は、生死に取りあはぬ所の歌にて候。能々御工夫有るべく候。

又、弘法大師の御辞世に、

今は早や後世の勤もせざりけり阿吽の二字のあるにまかせて

何れも悟りの人は、かやうに暇あき候様に、申置れ候。

又、慈鎮和尚の歌に、

仮の世に又旅寝して草枕夢の世に又夢を見る哉

引寄せて結べば草の庵にて解くれば元の野原なりけり

是は、色相の上を、軽く思し召し候へとの心にて候。いつの日、いつの時、御大事来り参らせ候とも、御心の内に、何事も思し召し候まじく候。「病難、若し痛くせめ来り候とも、其の苦しみに任せて、相果て候へ」と、大唐

の黄檗禪師の『伝心法要』と申にも、書き置かれ候。

日本にては、聖徳太子、病難の時、此歌あそばされ候。

浮雲は幾重にもかかれ空に消え月は隈無き光なりけり

此歌の心は、何事もとりあひ候はで、無念無想の所を用い候へとの御事にて候。

又、由良の開山の歌に、

何事も夢幻と悟りては現なき世の住まひなりけり

此哥の心は、如何なる大王・后の外、上下の人々悲しみ給ふは、死の道にて候。爰をさへ御覚悟候へば、すなはち安養の浄土、九品の蓮華にまとはれて、大安楽の御身とならせ給ふべし。

大世尊の御説法にも、女人成仏の難き事を、かく説き給ふ。かやうの事を聞き召して、御道心捨てさせ給ふまじく候。其の理を粗々申上候。男子に生を受け申候て、残らず成仏すべきに非ず。殊に童女は、八歳にして、三国に名を残し申し候。御経にも、賞め給ふ。然れば、女人こそ猶も御頼もしき事にて候へば、成仏とて、別に尊き光も放ち、奇特をも見せ申候事は有まじく候。御悟り候て、御心中に、これぞ、御不審候はぬと、思し召し候事御座候を、大悟りと申事に候。

仏御入滅の後、祖師先徳の沙汰し給ふ御法にも、見理・受用の二つにて御入候。参学をも御大儀に思し召すまじく候。其故は、祖師の色々苦勞し、朝夕の行体をなし、五戒・百戒・五百戒を立られ候事も、只一身の沙汰にて御入候。

御女房衆の御悟り有りしは、嵯峨の天皇の後、檀林皇后也。其外、人の数を知らず。美濃の国には、興性寺の千代野と申女、悟りて候。この歌に、

とにかくに匠みし桶の底抜けて水たまらねば月も宿らず

かやうの事を聞き召し候て、今日よりは、禪宗の参学に、御心を尽くし給ふべし。涯分御手を引き申べし。

先づ御くだ心を思い召したち、後の世を御助かり候はんと、御覚悟候へと勧め申物は、何物ぞや。又、かやうに不審を受け申候物は、何物ぞや。目に見えずして、様々になり行故に、六道輪廻の種となる事を、仏の三毒と説き給ふ。一に慳貪、二に瞋り腹立つ事、三に愚癡の心、此の三つを離れ候へと、古しへ今にいたるまで、示す也。

是を知らざれば、愛執の心深き故に、人を妬み、譏り、罵詈放言して、互いに苦しみの涙を流し、袖を絞る也。是れ皆一心のわざ也。久しく遠き事を観じ、物を忘れざるも一心也。四百四病を受け、大苦を受くるも一心也。雪霜の寒き事を厭ひ、大寒の苦となすも心也。

されば、此心一つを取りとゞめ難ければ、六道の業絶えず、生に生を重ね、死に死を継ぎ、浮き沈むのみ也。此心と云ふものは、如何にと判じ申に、影形も無きもの也。形無き故に、消え失せず。然れば、生も無く、死も無し。こゝを仏とも、金剛の正体とも述べ給ふ。無相にして有なるが故に、去來行き止まる事なし。住所更に無し。色相の生滅に預かるによつて。無常と説き、又は大死と述べて、是を憐れみ悲しみ、定離と申也。

かやうに申入候は、御心に形なき所を御覽ぜられ候へと申事にて候。何物か色相を去つて、仏神とも、鬼神ともなり申べく候や。浄土・穢土の事、是を以て、御分別有るべく候。御不審晴れ申候はば、迷ひの雲、千里万里の外に払ひ、一つとして御心止まる事有るまじく候。是を大正覚と申也。是をいたりて、色も無く、相も無く、声も無く、一念も無し。

是によりて、『心経』にも「色即是空、空即是色」と説き給ふ。一心の外に別の物無し。本より経も無し。心は、無始無終にして、住所無し。爰を開て、天地草木の、畢竟して見る法は浅く候。見ざる法は深し。早く生死の絆を離れて、大解脱の御身とならせ給ふべし。

御工夫にも、古則話頭、御不審離れ候由、仰られ候。尤に候。昔の御僧達、集め給ふなぞ多を、粗々仮名にて、御慰みに記し参らせ候。

以上が『法語』第一の内容であるが、その内容を仮に五つに分けて説明すると以下のようになる。

①物事への執着を戒め、名利をもとめてはならない。自分の名声を上げ、世間の人に誉められたいと思う思いを動機として堂塔を建立し、一時の富貴に驕り高ぶることを止めるべきである。真実の道とは、万のことにつけ世の中の掟に背かず、物事に公正な立場をとり、そうである人であればこそ、仏道において大事を成し遂げた人というのである。

②十萬億土の彼方に浄土を願つてはならない。自分の心そのものが浄土であり、慈悲心こそ仏である。あれやこれやと気をもんで穿鑿してはならない。生死について思いをめぐらしても、仕方のないことである。現実とは仮の世であるから、現実世界のことは深刻にならずに考えなさい。

③ 釈尊の説法にも、女人成仏の難しさが語られるが、そのようなことを聞いて、道心を捨ててはならない。たとえ男子に生を受けても、その全てが成仏するわけではない。龍女は八歳で道を悟り、三国にその名を残した。女人であつても頼もしいものだ。成仏は、尊い光を放つたり、靈妙不可思議なことを見せることではない。心の中に疑問が無くなつた時、それを大悟というのである。

④ 禅宗の参学を面倒くさがらず、御心をつくして行うように。御女房のお悟りになつた例として、嵯峨天皇の皇后、檀林皇后と、美濃の国、興性寺の千代野と申す女性があげられる。

⑤ 仏は三毒（貪・瞋・痴）を説き、そこから離れなさいと説き示している。このことを知らない者は、愛執の念が深く、それ故人を嫉妬して譏つたり、罵り、悪態をついてお互いを傷つけあつてゐる。これは一心のなせるわざで、ものを忘れないということもこの一心による。この心というものは如何なるものかといえば、影も形もなく、消え失せることもない。従つて生も死もなく、これを仏とも金剛の正体ともいう。一心は無相であつて、しかも存在するものでもある。心に形がないということをよくよくご覧なさい。色相あつてこそ、仏や神、鬼神が生ずる。浄土、穢土ということも、この点をもつて分別なさるのがよい。疑問が解消したならこの事を大正覚というのです。この境地に達すれば、色相もなく音声もなく一念すら無くなる。心は始めも終わりもなく住所もない。この点を敷衍していえば、天地草木に至まで、結局目に見える法は浅く、見えない法は深いのです。速やかに生死の絆からはなれて、大解脱の御身となりなさい。

〔第二部〕

本来の面目の示し様、「不思議不思議、未生以前、何れの所より来る」。又は、「如何なるか本来の面目」とばかりも問申候。此言葉を受取りて、三十日、五十日、乃至一年、二年工夫を遂げて、案じ申様は、「我身の生の所は、仏も、何れの祖師も知られまじく候。仏祖不識の所、是にて候」と申候へば、此上に受用とて、色々大事有る由、長老申され候間、又、是れを工夫して申様は、「天地開闢より以来、知られまじき」と受用す。爰にて、長老、尤の由申され候。学者、後に教へによつて、其語をするなり。大方此分に候。

「善も悪も思はず、いまだ自分が存在しない以前、自分自身はいったいどこからやってきたのか。」という問いに対す

る答えは、「天地が開け世界が生まれてより以来、知ることができない。」というものである。

柏樹子の話頭として、「如何なるか是れ祖師西来意」と云ふ。爰にて祖師の曰く、「庭前の柏樹子」と答ふ。「心を參ぜよ」と申に、而して、学者の曰く、「祖師の西来意、庭前の柏樹子も同じ心にて候。只天然の理にて候。前後知らぬ心にて候」とて、着語に「松は直く、棘は曲がり」と申。又、「色相分離して後、如何に」と問ふ。「松直からず、棘曲らず」と申す。三度四度申返して、是を至極の道理と申す。是は、「柳は緑、花は紅」の心也。此極意は、意と云ふ、根本無相なる所を知らん為也。大方此分に候。

「祖師（達磨）が西より来たつた意味はいかなるものか。」ここで祖師（趙州）は「庭前の柏樹子」と答えた。この話頭の意義は、「意」というものが、根本無相（本来姿形のないもの）であることを知らしめようとするものである。

万法不侶と云ふ古則、「万に侶為らざる人、是れ何人ぞや」と問ふ。学者、耳をそばだて、是を聞く。歳月経て申様は、「我が一心は、万法の外にて候。体も色も無く候。物に与せぬ物にて候。然も、天に覆ひ、地に満てり。然れば、左右も無く、脚下漫々として有なる故に、法界一心と観じて、大國の龐居士、名を残す。」是は、目に見ぬ物の有る所を見出して、かくのごとく申すなり。地獄、此時、破れ申候。心御入候也。

「あらゆる存在と関係を持たない人とは、どのような人であるか。」という問いの意義は、目に見ることのできない物のあることを見出すことの重要性を、知らしめようとするものである。

本有円成の事。「本来の仏、何の縁をもつて、迷倒の衆生となりたるぞや」。学者工夫して申様は、「根本は無念無相の仏なるを、衆生の色縁に引かれて、かやうに、寒温苦楽を得る身となりきたつて候。」爰に念を止め、此界に輪廻無くば、本有の仏性になるごとく、此時、種々伎倆を為し、種々言葉を尽くし、前後無生と見る也。

「本来仏であるのに、どうした因縁で迷える衆生となつたのか。」という問いかけの意義は、本来、三界六道などなく、「前後無生（後にも先にも何も生じない）」ということを知らしめることである。

誰その話の事。「釈迦・弥勒は、彼が奴。彼は是れ誰ぞ。」此悟りを承けて、歲月経て、老僧の前へ出て、「座上に和尚無く、眼前に我無し」と申て、一味平等のところ、何か差別有らんや。然らば、奴婢無し、我も無し。上下、元來、仏も衆生も一体ならずや。大方此分の心にて候。

「釈迦も弥勒も、彼の奴隷である。いったい彼とは誰であるか。」という問いの意義は、「座上に和尚もなく、眼前に私という存在もない」といって、このような一味平等の視点に立てば、いったい何の差別があり得ようか。差別が無い以上、奴婢ということも、我ということもない。上下ということについてみれば、仏も衆生も異なるものではなく、一体ではあるまいか、ということを知らしめようとすることである。

「如何なるか是れ地獄」と示されて、歲月を経て、工夫して申様は、「眼前是れ地獄」と申す。又問ふ、「何事に地獄ぞ」。「色相是地獄なる」。「色相分離しては如何に」。「眼光落地す」。爰にて、智慧によつて種々の語をかけ、大略、無に落候。あさましく候。

「地獄とは、いかなるものか」という問いかけの意義は、そのことを考えると、この世、我自身が地獄であることを知り、色相を離れ、結局地獄の事を考えると虚無に陥り、それほど愚かなことはない。ということを知らしめることである。

「古帆掛けざる時は如何」。学者の曰く、「小魚、大魚を吞む」。「又、掛けて後、如何」。「大魚、小魚を吞む」。此心は、船の帆掛かりて有時は、大なる魚が、小さき魚を吞むと云ふ也、帆の掛からざる時は、小さき魚が、大なる魚を吞むと云ふ心也。此心は、諸宗に少しも知らず、禪家の大事也。有と申さんとは、世に有事を吐く語を隠し、又、無なる事を申さんとは、世に無き事を吐て、心を隠して、生死思推の処を、難しく申さん為也。御理り御座候。直に申べく候。

「古帆が船に張られていない時はどうか」という問いの意義は、禪家においては、「ある」ということを言うときは、一般に「ある」ということを表現する言葉押し隠し、また「ない」ということを言うときには、世の中にあり得ないことを、「ある」といってその心を押し隠します。「生死思推の処」をより難しく言うための問いなのです。この話

頭の意味は、禪家の一大事なのです。

臨済の三要三玄と申事の候。かやうの事は、申尽くし難く候。天地の間に、三つ要む。三つ玄しと申事、何ぞや。是をしかも三宝と申事有り。古徳の心は、父と母と我と是れ三つの宝也。一つも欠けては、物ならず候。三玄と申は、源の無性は玄き貌也。出生して、万の事を行なひ候。爰に、大秘密の事有り。要の字、是れすなはち大事也。

臨済義玄禪師の「三要三玄」という公案は言葉では言い尽くし難いものです。「三玄」と言うのは、根源の無性（実体の無いもの）であり、玄いもの（渾然としていて見分けがたいもの）です。その実体のないところから生じて万般のこゝとを行います。ここに、大秘密の事があります。「要」の字こそが眼目です。

大國の南泉和尚、此猫児を斬る事は、大衆答へざる故也。趙州、爰に來りて、草鞋を取つて、頭へ挙げ、衣を顔に當て、和尚の前に出る。和尚、此の時、猫を斬つて、後悔す。趙州、甚だ以て面目なるが、第一に色相の逆意を斬る也。迷の衆生、色心共に、斬る事を得ず。様々に斬るといへども、鈍刀なれば、離る、所無し。文殊の利劍は、再び付かずと中心にて候。

唐國の南泉普願和尚が、猫を斬つて捨てたのは、和尚の問いかけに大衆が答えなかつたからです。この公案の意義は、第一に物への執着を断ち切ることの重要性です。自己を見失っている衆生には、外的な物事やそれへの執着をとものに断ち切る事はできませんし、たとえそれぞれに断ち切るといっても、あまりにいい加減なので、すっかり断ち切るわけにはゆきません。しかし、文殊のすぐれた劍は、切つ先鋭く執着を断ち切つて、二度とは戻らない、という意味を知らしめています。

臨済の四喝とて、人の死たる所に到りて、喝す。此心、確かに心得たる僧稀也。只成就の僧と申は、本分に落ちて、是を至極す。古人の見理、此所に非ず。既に臨済は、「命根本不絶」と云へり。然れば、當時の僧達、大なる誤まちなりとは、未学にして衣を更へ、人の眼をつぶして、布施物を取り、己れが生々世々の炎を招く。憐れむべ

きものなり。

臨濟の四喝といつて、人が死んだ場所に行つて喝す。この公案の意義は、すでに臨濟は「命の源は絶ち切れない」といふ事を言っていることを知らしめる事です。

百丈野狐の話の事。「大修行底の人、還つて因果有るや、也た無しや」と問ふ。答へて曰く、「因果に落ちず」となり。此報に因りて、五百生野狐の身に墮して候。因果は歴然有る物と申旨にて候。未だ悟らずして、声聞の見解にて、因果は無しと答へたる事にて候。何れも別に深き事御座候はんと申し召し候まじく候。此不昧因果と申すは、因果に味からずとの事也。不落因果とは、落ちずと云ふ心にて候。此話頭の眼は、生々世々の事を、狐に寄せ、説かれたる所、大智なる故に、大智禪師と申也。一状、大國にて、色々仏道修行の事、連々に申上參らせ候。「ひたすらに修行に徹した人には、いったい因果があるのかないのか。」という問いの意義は、因果は歴然として、誰彼例外なく存在するという意味を知らしめることです。そして、この公案の眼目は、生々世々輪廻することを、野狐にこと寄せて説いているのです。

又、申候。人迷ふ時は、火を以て火を消さんとし、水を以て水をかく。大海を沙を以て埋めんとし、土を以て山を囲はんとす。かやうの愚かなる事は、人々仏道に心の遠ざかる事、萬里を隔て、手には百八煩惱の絆なる珠数を爪繰り、二世三世を祈り、生霊・死霊の崇りを見出し、石塔・卒都婆に奇特有りと思ひ、梓にかけて、死人と言葉をかはす事を云ひて、涙を絞り、諸の器用、諸の祿の道理を失なひ、仏菩薩に妄語をかけ、義理を背き、いよく盲目のごとく、竹の内より天を測る物は、生々世々浮かぶ事有べからず。

「西方非西、東方非東。無極楽無地獄、浄土非浄土」慳貪を斬らずして、しかも又、しかも外の大空三昧にして、大蓮華の中に有り。只正直慈悲行無慚也。念を斬つて、しかも又斬らず。是を通力自在の僧と申也。

唐国、我朝に至り、上下万民、仏道を願ふ事、何宗が宗として、色々立ては有りといへども、其源は、何れも極楽浄土に至り、地獄墮つまじきとの方便也。此浄土と云ふは、何処なれば、我心の内に有り。又、地獄は何れぞなれば、大事、我心の内に有り。

或る人、達磨大師に問ふ、「地獄とは、何れの所ぞや」。答へて曰く、「汝が心中に、貪瞋痴の三毒、是れ也。貪瞋痴とは、貪欲とて、万の愛念・執着の欲を申也。瞋とは、腹を立つる念を申也。癡とは、愚癡とて、何事も心の俤に無き事を嘆き悲しみ、我と我心を悩ます事を申也。此三毒、かくのごとく、善悪の法を造り出し、地獄に墜つるなり。地獄とて、別に余の世界有る事にてはあらず」。

又問ふ、「極楽とは、何れの所ぞや」。答へて曰く、「極楽浄土とて、外に有るべからず。汝が心中の三毒を払ふ所、則ち浄土なり」と答へ給ふ。仏と衆生と隔て有る事無し。迷の衆生、此貪瞋痴、我本心にて無き事を知らず、此一念愛し憎むによりて、地獄に墜つる也。此三毒を本として、八万四千の煩惱起る也。是れ則ち地獄なり。

仏と云ふも、悟りと云ふも、名は変はれども、同じ道也。我本心を悟る人を、則ち仏と名付くる也。然れば、我心の外に、別に仏無き事を能く心得て、此の上を常々心にかけて御工夫有らば、道に御当たり候はん事、疑い有るべからず候。

「現在の果を見て、過去・未来を知る」と、御経に説かれ候。此心は、今爰にて、悪心・悪逆を心に忘れずして、今其の心を取出し、行なふ事也。今、此生にて、その心を忘れずば、又、今の心を未来へ引きて、人に生れ出べきとの事也。

仏は方に自在を得たりといへども、見当たらざる事有。一には、無縁の衆生度する事能はず。二には、衆生界をつくる事能はず。三には、造業転ずること能はず。前世の業因により感得したる善悪の業報なり。かやうの決定の業報をば、仏菩薩の身にても、転ずる事叶はず。貌の善悪、福德の小大、寿命の長短、種姓の高位の事、此等皆前世の業因にたへたる定業也。慈悲心は福德の家に生れ、慳貪は貧苦の身に至る。柔和忍辱の心は姿善く生れ、礼拝は高家に生る。殺生をしたる物は、短命に生る。かくのごとく、何れも皆前世の悪因により、悪果を得たる。人、此理を知りて、今世にも悪行を造らざれば、来世は必ず善果を得べし。

人が自己を見失っているときは、盲目的で、あたかも竹の筒から見て天を測るようなものであり、そのようなものは何度も何度も輪廻して、六道から脱することはありません。

「西方は西ではなく、東方は東ではない。極楽もなく地獄もなく、浄土は浄土ではない。」このような自由自在の発想をするのが僧というものです。

中国から日本に至るまで身分の高きも低きも、あらゆる民が仏道を通して願うことは極楽浄土に至り、きつと地獄に墜ちることのないようにとの方便なのです。この浄土というものは、何処にあるかというのと、自分の心の中にある。地獄は何処にあるかというのと、その大事は心の中にある。

ある人が達磨大師に「地獄は何処にあるのか。」と尋ねると。達磨は答えて言う、「お前の心の中にある、貪り、瞋恚、愚癡の三毒がそれである。」

さらに「極楽とは、何処にあるのか。」と質問すると、「極楽は（自己の）外にあるものでは決してない。自分の心の中にある三毒を払いさったところが、そのまま浄土なのだ」と答えた。仏と衆生とは全く隔てがない。

仏というのも、悟りというものの、その名称は変わるが、同じ道（仏道）なのである。したがって自己の心のほかに仏はないことをよく心得て、このありようをいつも心にかけて、工夫を重ねれば道にかなうこと必定である。

「現在の果を見て、過去・未来を知る」と經典に説かれてあります。この意味は、今この世で「悪心」「悪逆」を心に忘れることなく、今その心を取り払って行いをするということです。

仏は諸事万般において自在の力を得ているけれども、それでもできないことがある。一つには、縁無き衆生を救う事はできない。二つには、衆生界そのものをなくすることはできない。三つには、一度作られた業は転換することはできない。

〔第三部〕

- ・ 三日月の満つれば欠けてあともなしとにかくにまた有明の月
- ・ 雲の身に思ふ心も空なれば空と見るこそ本の空なれ
- ・ 嵐山に咲ける桜と見るからに猶はかなしと身こそつらけれ
- ・ 待ち得ても程はなかりし時鳥友を誘ひていづちゆくらん
- ・ 歳々に時雨の染むる紅葉を四方のうつろふためしとも知れ
- ・ 月は家心は主と見る時は猶仮の世の栖居なりけり
- ・ 家破れ主も失せなん古への父母知らぬ心なるべし

- ・花を見よ色香も共に散り果て、心無きだに春は来にけり
- ・初雪の積もるは程も無かりけり消ゆるたねとは何か見ざらん
- ・移り行く月日の数は数ふれど我が年経ると知る人は無し
- ・何時までか身を徒らになし果て、終の道をば願はざるらん
- ・六親の為と思はば出家して現世後生の導きをせよ
- ・蓮葉の濁に染まぬ露の身はたゞそのままの真如実相
- ・にわかには願ひてもやは法の道常々坐禅工夫してみよ
- ・仏とて外に求むる心こそ迷ひの中の迷ひ成けり
- ・隔つとて何かは有らんをしなべて一切衆生悉有仏性
- ・説きもせず言ひも得ざりし所をば知らぬ物ぞと知るぞ知るなる
- ・散れば咲き咲けば又散る春毎の花の姿は如来常住
- ・輪廻する曠欲愚癡の絆をば斬らではいかで身は浮かぶべき
- ・濡らしつる袖の涙の乾く間も無き面影の月にぞ立添ふ
- ・類も無く唯一筋の法の道を行かぬ心の小車は憂し
- ・をのづから身は徒らになりにけり虚空を常の住処と思へば
- ・仮の世に徒なる露の身を持ちて千歳を競ふ人のはかなさ
- ・世の憂さに変へて住みぬる柴の戸に問はじ顔なる人も恨めし
- ・妙なりし法の蓮の花の身は幾代経るとも色は変はらじ
- ・霊仏霊社と云ふて皆人の何嘆くらん心尽くしに
- ・そのままに生まれながらの心こそ願はずとても仏なるべし
- ・露と消え幻と醒め稲妻の影のごとくに身は思ふべし
- ・願はくば善き事はせよ悪しき事は二世の障りと深く慎しめ
- ・嘆くなと真の道はそのままに二つも無し又三つも無し

- ・ 楽々と心からにて彼の岸に渡るも易き法の船人
- ・ 報ひぞと見るは愚かの心かな善き事につき悪しき事にも
- ・ 有にも非ず無にも非ざる其中に我が故郷の人の知らずや
- ・ 生き死にの理知らぬ僧どもは犬の衣を着たるなるべし
- ・ 後の世のためと思はゞ慈悲心に情けをかけて他を利益せよ
- ・ 奥山に結ばずとも柴の庵心からにて世をば厭ふべし
- ・ 国いづく里はいかにと人間はゞ本来無為の物と答へよ
- ・ 焼き捨てて灰になりなば何物か残りて苦をば受けんと思ふ
- ・ 妄執の雲をしさても遙けには身のなる果てに地獄天堂
- ・ 煙立つ野辺の哀れを何時までか余所に見なして身は残りなん
- ・ 吹く時は音騒がしき山風の吹かぬ時には何となるらん
- ・ 心をば墨の衣に染めなして身をば憂世の有るに任せて
- ・ 画像にも木像にもよく祈る身は病難死苦の逃れ有るかは
- ・ 寺を建て堂を立てたる功德には只常々の慈悲やましなん
- ・ 明日までと世をば頼むぞ朝顔の露よりも猶徒なりし身を
- ・ 前の世に慈悲をなしたる人をこそ人もそのまゝ、仏とは見れ
- ・ 聞く事と見る事にだに迷はずば何か菩提の障りなるべき
- ・ 夢の世の先を深くも厭ふこそ安楽国を知らぬ人なれ
- ・ 眼の前の迷ひ悟りの所をば真の道を知る人ぞ知る
- ・ 見る毎に皆そのままの姿かな柳は緑花は紅
- ・ 色相はその時々に変はるとも不生不滅の心は変わらじ
- ・ 会者定離生ずるものは必滅の理知らで何嘆くらん
- ・ 日々に猶行末遠くなりにはけり何時を限りの命なるらん

・ 諸共に哀れを思ふその中に有るは無く無きは数添ふ
・ 関守に我心をや貸しぬらん直ぐなる道を行きかぬる身は
・ 澄み上る心の月の影晴れて限なきものは本の境界
・ はかなくも明日の命を頼むかな昨日は過し心ならず
・ よしや君住憂くば世に住まで有らん深き山には共に入とも
・ 悟り得て心の闇の晴れぬれば慈悲も情けも有明の月
・ 出るとも入とも月を思はねば心にかゝる山の端も無し
右の一卷、由無し事なれども、心ざす事の侍りしかば、人の持てるを請て、写し止め侍りぬ。童子、沙を集むる戯れだに、功德の有る由侍り。ましてや、かく尊き法の道を写し止め侍りしかば、仏になる事、疑い有べからずとぞ思ひ給ふる。此次に思ひ出し、言ひ続け侍りぬるまゝに、心に任せて、

・ 願はずと道の道たる道に行かん身の限り有る道を道にて

以上が『法語』第三部の内容であるが、その内容を仮に七つに分類して概略的に説明すると以下のようなになる。

① 雲や花のようにはない身であるが故に、我が身が実体のないものであればこそ、つらいことだがそれこそ本来空の姿である。従つて、今自分が居るこの世は所詮仮の世の住まいなのだ。所詮はかりそめであるこの世の中に、はかない露のごとき身をもつて、千年も長らえようとする人の愚かしさよ。明日までこの世に長らえんことを頼みにしていることだ。朝顔に置く露よりもなおはかないこの身なのだ。

② 花を見るがいい、色も香ももろともに散り果てて、心を持たぬものにさえ春はくるのだ。刻々に移り行く月日を数えても、自分が刻々に年をとっているのだと自覚している人はいない。茶毘の煙が立ち上る野辺の哀れを、いつまで他人事と見なして、我が身は残つていられようか。

③ 親族のためと思うならば、出家して現世と来世との導きをせよ。急に思い立つて願つても成就しがたい仏道である。常日頃より坐禅をし修行をしなさい。心を墨染めに染めながら（出家の身でありながら）我が身は世間のあるがままに渡り行く。

④ 仏を求めると言つて、自分の外に求めようとする心こそが、迷いの中でも最たる迷いなのだ。総じて一切の衆生は

みな仏性をそなえているのだから。靈驗あらたかな寺社だといって参詣する人はみな、さまざまに思いをなし、いったいなにを嘆くのだろうか。生まれついた心そのままこそが、何を願うことがなくても仏なのである。絵に画かれ像に彫られた仏祖に対してひたすら祈る人は、病や死の苦難から逃れることができない。姿形あるものは時々刻々に変化するとしても、生滅に預からない心は決して変わることはない。

⑤善行をなして、悪行は今世と来世の障碍となると思つてどうか深く慎んで欲しい。後世に善果を得たいと思うならば、慈悲の心を抱いて、他人に対して情けをかけて、他人にとって善いことをしなさい。寺や堂を建立した功德よりも、ただ日頃の慈悲の心の方が勝っている。前世において慈悲の行いをした人は、肉身そのままが仏である、(即身成仏)とみることだ。悟りを得て心の闇も晴れたので、今は慈悲も情けも持てる身となった。

⑥出身の国はどこか、故郷はどこかと人が尋ねたならば、私は元より何にもよらないものと答えるがいい。見る度毎に世にあるものはすべてあるべき姿を示している。柳は緑の葉を垂れ、花は紅の色を吐く。

⑦夢のようなはかないこの世にあつて、身の行く末を深く忌み嫌うのは、浄土をしらぬ人だからだ。

三 おわりに

紙面の都合上、行論中に言及することは出来なかつたが、『東海一休和尚年譜』、『自戒集』、『狂雲集』によれば、一休は比丘尼への蔑視観をもっていた。しかしそれは、一部の比丘尼、つまり一休の兄弟子である養叟宗願やその弟子春浦宗熙より、仮名によって説明された古則を購入し得法をするという、また、性的な情交を受け入れることで得法するという、いかがわしい禅風に近づいていた比丘尼に対してであつて、すべての比丘尼への蔑視ではない。仏道に対する真摯な態度がみられる比丘尼には、夜を徹して教化・説法が行われるなど、あくまで仏道とどのように向き合うかによってその比丘尼への観念は変化していたのである³⁾。

得法、印可証明の受授を目的としない、在家の女人に対しても同様で、公案についての法話を真摯に求める仏道者があるなら、しかるべき態度にてその要請にに応じていたと考えられる。また、『開山下火録』の法語からは、五障三従・変成男子といった、所謂、仏教的な女性蔑視的表現は一つもみられず、女丈夫という言葉がみられるように、性差別的観念はみられなかつた。『法語』の中にも、釈尊の説法にも、女人成仏の難しさが語られるが、そのようなことを聞き

て、道心を捨ててはならない。たとえ男子に生を受けても、その全てが成仏するわけではない。龍女は八歳で道を悟り、三国にその名を残した。女人であっても頼もしいものだ。成仏は、尊い光を放ったり、靈妙不可思議なことを見せることではない。心の中に疑問が無くなった時、それを大悟というのである。という内容の文言があり、女人の道心や悟りについて積極的な評価をしている。

『法語』にみる一休の女人教化は、自己の心の他に仏はないことをよく心得、真摯に心の中の疑問を参学によってなくす事を主眼としていたと考えられる。

註

(1) 『東海一休和尚年譜』(平野宗浄訳注『一休和尚全集 自戒集・一休年譜』(春秋社 二〇〇三年)) 所収。今泉淑夫編『日本仏教史辞典』(吉川弘文館、一九九九年) 三一―三二頁。駒澤大學禪學大辭典編纂所編『新版禪學大辭典』(大修館書店、一九九六年)。七三五頁。

(2) 飯塚大展訳注『一休和尚全集 一休仮名法語集』(春秋社、二〇〇〇年) 所収。飯塚大展氏は『一休和尚法語』の解題において、「『一休和尚法語』は、一連の禪宗系仮名法語が数多く開版された江戸時代初期(寛永年間を中心とする)の出版状況を反映して成立したものと考えられる。」とされ、夢窓疎石の『夢中間答』や『大燈国師仮名法語』との影響関係も指摘し得ると論じられている。そしてこの『一休和尚法語』が、先述の『大燈国師仮名法語』『聖一国師仮名法語』『抜隊和尚仮名法語』等と共に、江戸時代初期に著作され、これら仮名法語の研究は、江戸時代の仏教思想を考えるとというアプローチをとるべきであると結論されておられる。しかし、本『法語』が後代広がりをもせた一休禪の一端であると考えれば、一休の禪風がどこかしら残っているはずではないだろうか。一休に仮託して書かれた『法語』であれば、一休に仮託するだけの何かがあるために仮託されたのではあるまいか。後代に一休に仮託されて書かれた仮名法語の中に、一休の禪風的一端を垣間見る姿勢で、本仮名法語の中に一休の女人教化の内容を探求した。

(3) またここで留意しておくべき点は、一休が著した『自戒集』や『狂雲集』における養叟宗頤や春浦宗熙、比丘尼衆に対する罵詈雑言を、そのまま、当時の大徳寺を中心として行われていた教化の様相として捉えるべきではないということである。これら一休の批判的見解がある反面、船岡誠氏が、「一休と養叟―一休論の再検討―」(『金沢文庫研究』二八三、一

九八九）に指摘したような見解もある。つまり春浦や養叟の活動は、一面で禅の庶民化をはかり、大徳寺教団の繁栄もたらしたのであり、比丘尼についても、応永元年に薪村の山住まいをしていた一休を訪ね、真摯に夜通し問答を行う者もあったのである。従って、一休の『自戒集』や『狂雲集』における、養叟や春浦や比丘尼衆に対する批判的文言を、一概に文字通りに捉え、一休に比丘尼に対する蔑視観があったことのみを強調すべきではないことを申し添えておきたい。

(4) 平野宗浄訳注『一休和尚全集 自戒集・一休年譜』（春秋社 二〇〇三年）。所収『開祖下火録』には、四六〇名分の下火が記されているが、その内確実な女人の下火と判断できるものは二七である。女丈夫の言葉は次のように使用されている。

見色宗心 下火云

法法本来法、心心本来心。女丈夫の機用、鉄を点じて黄金と作す。正に与麼の時、見色宗心大姉、四十四年、流注、什麼処にか勸絶し去る。日照し天臨む。与麼なりといえども、即今末後の一句、作麼生か行履し去らん。火把を以て地上に劃一劃して云く、若し楼に登って望まずんば、焉ぞ滄海の深きことを知らんや。

（原漢文）（傍線筆者）

慈貞 下火云

貞潔なる女丈夫、宗門作家の徒。劫火、大千を焼く、無無無無無。恁麼なりと雖然、慈貞禪尼、出身の一句、如何んが受用し去らん。火把を以て地を打って云く、前頭は駟腮馬腹、後頭は普賢文殊。

（原漢文）（傍線筆者）

風光信成 下火云

大地山河、忽ち見成す、風光は一段と画けども成り難し。閻魔、死鬼来って相見すれば。玉殿瓊楼、何の所成ぞ。恭しく惟んみれば、典侍五品風光信成尊位、六十余年の作略、信心不二、不二信心。着々たる出身の路、独掌、浪に鳴らず。貴遊清宴、見色聞声。逆行順行、七縦八横。謂つべし、這箇の女丈夫、天然に衲子の眼睛を具すと。這裏に到つて、見成公案、如何んが領略せん。看る時見えず、月白く風清し。恁麼なりと雖然、末後の牢関、什麼処にか行履し去らん。泝汾信を絶ち、心逕に若生ず、那箇か是れ信を絶つ一句。火把を以て斬る勢を作して云く、閻浮日午に三更を打

す。

(原漢文)
(傍線筆者)